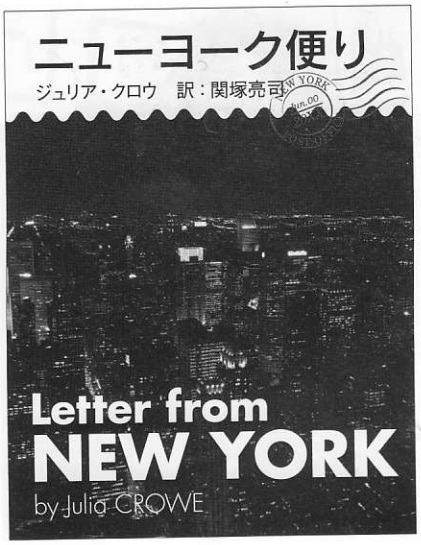


●ベテラン・ギタリスト、中林淳眞がニューヨーク・カーネギーホールのワイル・リサイタル・ホールで演奏

ギタリストの中林淳真が、ニューヨークデビュー50周年を記念して、2013年11月にカーネギーホールの3階にあるワイル・リサイタル・ホールで公演した。

彼は、生活の場に音楽を届ける“セレナーデ・コンサート活動”によって1,500万円を越える資金を集め日本赤十字社に寄付している。また、日本で発売する、アーネスト・ヘミングウェイの『老人と海』を俳優のグレゴリー・ペックが朗読したCDのバックグラウンド・ミュージックを作曲している。

カーネギーホールで行なわれた50週年記念コンサートの収益金は、ハリケーン“サンデー”の被害者救済を継続しているアメリカ赤十字社に寄贈された。

カーネギーホールで開かれた感傷的な彼のコンサートの第1部は、短い休憩を入れた1時間という長いプログラムだった。

まず最初に演奏したのは、八橋検校と吉沢検校の作品を彼自身が編曲した〈2つの箏曲〉だった。続いて、彼が作曲した〈「五木の子守歌」による幻想曲〉、ガスパル・サンス〈パバーナ〉、〈エスパニョレッタ〉、〈フォリオス〉、〈カナリオス〉、フランシスコ・タレガ〈ラグリマ〉、〈アデリータ〉、〈前奏曲第5番〉、ホアキン・ロドリーゴ《アランフエス協奏曲》より〈アダージョ〉、マヌエル・デ・ファリャ〈粉屋の踊り〉を演奏した。彼の演奏は思慮深く、優雅さとエレガンスにあふれていた。

第2部では、中林自身の作曲による、南米の複雑な声部と祈りのための詩情豊かな美しいメロディーの《絵画的ギター組曲「ラテンアメリカ」》からの抜粋を演奏した。曲目は、〈メキシコのセレナーデ〉、〈マヤの男〉、〈夜想曲〉、〈夜明けのコーヒー〉、〈カリブの真珠〉、〈ハープのごとく〉、〈インカ王女の子守歌〉、〈アンデスの笛〉、〈地平線のサンバ〉だった。

ワイル・リサイタル・ホールで演奏する中林淳眞

中林淳眞

続いて、マヌエル・ポンセの作品を彼が編曲した〈エストレリータの主題と変奏〉を演奏した。

中林の演奏は、ギターと音楽に対する彼の愛を人に伝える能力と、大らかな精神と心の素晴らしさが印象的であった。彼が作曲した作品には、フレット上の弦を叩くタッピングやスペインのフラメンコのスタイルで、表面板を叩くといったテクニックが織り込まれ、それが彼の音楽の多彩なメロディーを作り出す1つの手法となっていた。

ナルシソ・イエペスに師事した彼は、イエペスのレッスンについて、次のように述べている。

「レッスンは厳しかったですが、丁寧でした。強度の近視眼鏡を使っていたイエペスが、楽譜を顔にくっつけるようにして見るときは、雷が落ちる前兆でした。でも、彼は優しい人でした。私がパリのサル・プレイエルにあるショパンホールでデビューコンサートを開いたとき、その3日前に大ホールで演奏した彼は、マネージャーに指示して、彼のプログラムに私のコンサートのチラシを入れさせたのです。そのお陰で大勢の人が聴きに来てくれました」

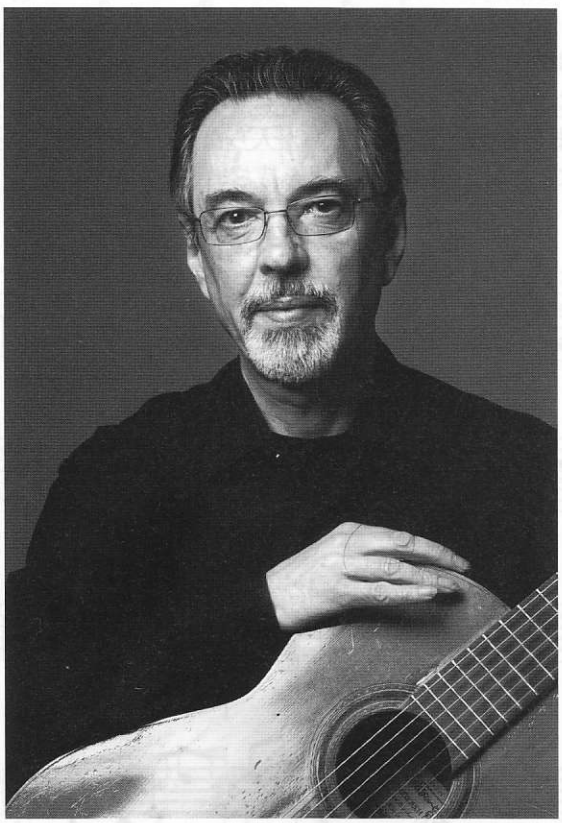
また、作曲をフェデリコ・モレノ・トローバに師事した中林は、その経験についても次のように語った。

「私が、作曲した楽譜の一部を消していると、M＝トローバが言いました。『このフレーズは何ですか？ なぜバスクラリネットなのですか？』と。そして彼は『ここはイタリアンファゴットか、バスーンにすべきです』と筆を入れたのです。その結果オーケストラが鳴り響きました」

「その後、オーケストラの練習のときに、彼はこうも述べました。『これは何ですか？ 古いブラームスのような匂いがする。でも私は好きです』。ギターに対して彼は、更に厳しく、納得がいくまで、際限なく、スコアを修正しました」

●エドゥアルド・フェルナンデスが、NYクラシカルギター・ソサエティーの演奏会に出演

ギタリストのエドゥアルド・フェルナンデスが、マンハッタン音楽院でゲストとしてマスタークラスを開いた後、バルークホールで、ニューヨーク・クラシカル・ギターソサエティーの国際コンサートシリーズのオープニングとして演奏した。



エドゥアルド・フェルナンデス

ウルグアイ出身のフェルナンデスは、7歳でギターを始めた。彼が師事した指導者の中には、アベル・カルレバーロ、作曲家のグイード・サントルソラ、ウルグアイの前衛作曲家兼ピアニストのエクトール・トサールがいる。

1972年ブラジルで開かれたポルト・アレグレ国際ギターコンクールで優勝した後、1975年パリで開かれたラジオ・フランス主催のパリ国際ギターコンクールで第2位を獲得、同年スペインのマジョルカで開かれたアンドレス・セゴビア国際ギターコンクールで優勝した。

彼が、ニューヨークでデビューコンサートを開いたのは1977年だが、ロンドンのウイグモア・ホールでデビューコンサートを開いたのは1983年である。

彼は、既に18枚のアルバムをデッカ・レコードからリリースしている。ソロをはじめとして、イギリス・チェンバー・オーケストラやロンドン交響楽団との共演を含め、バッハから現代音楽まで、レパートリーの幅は広く、その中には、ベリオの〈セクエンツァXI〉のような世界初録音も幾つか含まれている。

フェルナンデスは、ウルグアイのモンテビデオ音楽大学で教鞭を執ってきたが、現在はフェロー研究員の役職にある。

作曲家としての彼は、現代音楽のための国際協会（ISCM）のウルグアイ支部事務局長を2年間にわたり務めた。ウルグアイ国際音楽諮問会議の創設者である彼は、1996年以来、隔年で開催されているモンテビデオ国際ギターフェスティバルの芸術監督であり、2000年からはコロンビア国内ギター会議の芸術監督も務めている。

フェルナンデスは、コンサートの前半で、ソルのエチュードのうちセゴビアが選曲して番号を付したものの中から、4曲を選んで演奏した。最初の曲は、技術的に難しいけれども穏やかなカンタービレ〈Op.6-12〉。続いて、フレット上を指が跳躍するような速い作品である〈Op.6-6〉、瞑想的で優雅な3声部が重なるハ長調の作品〈Op.6-8〉、ベースの強いリズムに乗せて装飾的な速いメロディーが特徴であるヘ長調の〈Op.29-12〉である。

また、フェルナンデスは、レオ・ブローウエルが現代音楽に興味を持った時代の作品〈パラボラ〉を演奏したが、この作品は7つのセクションで構成されている。彼は、フラメンコ・スタイルで表面板を叩くなど、速いパッセージを連続して演奏した。

コンサート前半の最後に演奏されたのは、フェルナンデスの編曲によるバッハ〈シャコンヌ BWV1004〉で、声部の歌い分けが素晴らしい明確な演奏であった。

短い休憩の後、後半の最初に、ハンス・ヴェルナー・ヘンツェの《3つのテントス》を、深く重いがクリアな表現で演奏した。この曲は〈Du schönes Bächlein〉、〈Es findet das Aug'oft〉、〈Sohn Laios〉の3楽章で構成されているが、ジュリアン・ブリームに献呈されたギター独奏曲の一つとして1958年に書かれた作品で、その後《王宮の冬の音楽》が書かれている。

続いて、ベンジャミン・ブリテンが作曲したダウランドの歌曲〈来たれ、深き眠りよ〉を主題とする8楽章からなる作品〈ノクターナル Op.70〉を気品のある解釈で演奏した。この作品もジュリアン・ブリームのために書かれている。

フェルナンデスが、コンサートの最後に演奏したのは、ロマン派の代表作とも言うべき、マウロ・ジュリアーニの〈ロッシニアーナ第3番 Op.121〉だった。

フェルナンデスは、流暢な音楽性と、解釈と、目に見えないテクニックと、疲れを知らぬエネルギーを持った優れた芸術家である。

メルベイ出版から刊行された彼の著書『テクニックとメカニズムと学習』は、音楽を演奏し練習する上で最も重要な要素を体得する方法、正しいテクニックを身につける方法、音楽的な困難を知的に克服する手法、について解説している。

詳しくは、
http://www.amazon.com/Mel-Bay-Eduardo-Fernandez-Technique/dp/0786647469
を参照。